

「被災状況を調べるために、各教区のホームページ開いていて、さいたま教区サポートセンターとボランティア登録制度を見つけました。すぐに電話を入れたんです…。」 62歳、被災地でのボランティア、八日間。

「さいたま教区サポートセンター」のボランティアに参加して

2011年3月11日の東日本大震災の被害に遭われた皆さまにお見舞いを申し上げます。そして尊い命を、一瞬の津波に飲み込まれた方々のために、天の御父のもとで安らかに憩われますようにと祈ります。

私たちの小さい共同体では、この惨事をテレビ報道で目にするたびに、心が押しつぶされそうになり、涙を流しているだけでなく、祈るだけでなく、何かできないかと話していました。カリタスジャパンの義援金も送り、超修道会の支援物資の要請にも応えましたが、それだけでいいのだろうか？ という疑問がいつも心の中をよぎっていました。

カトリック教会の震災の状況を見たいと思い、ボランティア要請がないか各教区のホームページを開いていたら「さいたま教区サポートセンター」の立ち上げとボランティア登録制度を見つけました。早速電話を入れたところ、「現在はまだ現地に入れる状況ではないが、シスターなら傾聴ができるので登録しておきますよ」の返事をもらい、「私はおばあさんですから、現地では無理だと思うので後方支援でも結構です」と言ってお願いしました。そして三日後に「3月28日～4月4日まで大丈夫ですか？」と電話があり、あわてて準備をはじめたのです。



小名浜港 岸壁に乗り上げた漁船



さいたま教区は茨城県、栃木県が被害を受けましたが、仙台教区福島県南部の白河市といわき市をカバーすることを平賀司教様と谷司教様が話し合われ、私たち第二陣のメンバーは茨城県北部の日立教会の信徒会館に宿泊し、毎日高速で一時間、いわき市に通いました。ちなみに構成メンバーは、イエスの小さい兄弟会のブラザー40歳、高崎教会信徒男性40歳（プロの運転手）、草加教会信徒男性63歳（消防署を定年退職）、川越教会信徒女性49歳（ベトナム人）、愛徳カルメル会シスター64歳、そして私62歳、とてもバランスのとれた6名のグループでした。

いわき市では3月29日現在で、カトリック教会内での支援が確立されておらず、聖公会の聖テモテ教会に協力する形で、さいたま教区本部から司祭一人、ブラザー一人、神学生が派遣され、物資も送っていました。しかし関西神戸の聖公会の司祭方が4名ほど支援のために来られ、ブログを通じてたくさん物資が届くようになりました。また私たちの目的とは少し違うことから、カトリックいわき教会の神父さんを訪ね、カトリック教会を拠点として活動するための場所をお願いしたところ、カトリック小名浜教会（巡回教会）の小さい部屋を貸してくださいました。これで教会の信者さん、幼稚園の先生達に助けられて活動することができるようになり、また次のグループの拠点として、カトリック湯本教会（巡回教会）の旧司祭館を片付けて宿泊ができるように整えました。



いわき市は岩手県、宮城県など北に比べて被害が少ないとされ、自衛隊の支援もなく、夜は避難所、昼は泥だらけの家と外回りを自力でがれきを片付ける人たちを見た時は、なんとも言えないものがありました。地震、津波、原発、風評被害という厳しい現状の中にある人たちにとって、明日という日はどんな日だろうと、胸が押しつぶされそうでした。



特に小湊地区、永崎地区、江名地区と、私たちが訪問した浜の近くの人たちにとって、300 トン級の船が陸に押し上げられ、水族館も津波に襲われて魚は死んでしまい、魚市場は全滅、働く場所はありません。家を流された人、車は壊れひっくり返り、橋は落ち、道は寸断、信号機は傾き、停電と断水、地域は異臭で大変でした。現場にいて、「怖い！」と感じたのは、目に見えず、肌にも触れない放射能です。一日中活動しているとラジオ、テレ

ビのニュースがなく、さいたま教区本部に放射能についての現状を FAX で送ってもらった
こともありました。しかしマスクをしていない人々も多く、私も 2 日目から外しましたが、
子供たちは屋内待機で、学校が始まっても屋外で遊ぶこともできないと言われていました。



小名浜カトリック教会は、港まで車で 10～15 分の距離ですが、すぐそばまで津波が押し
寄せたそうです。教会内のご像はすべて壊れ、ご聖櫃も落ちて壊れていました。水道管も
壊れ、断水状態が続いていました。修理は 100 番目ということでしたが、いつ順番がくる
のか気が遠くなるような話でした。地元の様子も、人々のことも知らない状況の中で、信
徒会長の鈴木さん（女性）が活発に動いてくださり、幼稚園の父兄と先生方の協力により、
毎日の新しい出会いと、瞬時に変わる出来事に対応することが出来ました。



さいたま教区本部から送られてくる生鮮野菜は、お母さん方や一人暮らしの人にとって風評被害の影響もあり、「20日ぶりです」と涙を流す人もありました。風評被害で自殺した男性のニュースもありました。支援物資の配給は特に独居老人に届くようお願いし、また私たちも実際に訪問して届けました。浜で働いている人たちや独居老人、パンしかない避難所の方たちに弁当を作り、喜ばれました。灯油とガソリンの配給は避難所の方々にとっては貴重品であり、断水している地域の人々や原発の影響があり、子供たちのための水は本当に「命の水」でした。自衛隊が給水をしていましたが、お風呂はどうしているのかしら、トイレはどうなっているのかしら、と気になることばかりの毎日でした。



さいたま教区の谷司教様が、ご自身で東京の市場まで野菜を仕入れに行き、2トントラックに積んでこられ、幼稚園、教会関係、独居老人、避難所、浜で自宅の片付けにきている人たち、道で出会った人たちに配給して回り、とても喜ばれました。特に子供たちは自分の好きなものを支援物資の中に見つけて声をあげて、両親に見せていました。



私たちの活動を支え、協力してくださった教会の信徒の皆さんと幼稚園の先生方も同じ被災者です。心に傷を抱えながらもお互いにいたわり合い「ボランティア活動」をしておられますが、「シスター、子供たちをあずかるのが怖いんです。お母さんが一緒にいるといいのですが、とても不安なのです。私、トラウマになってしまっているのです」という幼稚園の園長先生の言葉を私は忘れることができません。私たちの支援は物資の援助だけでなく、独居老人や避難所の訪問だけでなく、多くの心の傷を抱えてしまった方たちの傾聴

に、これからの時間を割いていくことになるでしょう。4月4日、さいたま教区本部に戻り、引き継ぎを終えた後、「トラウマを抱えた人々への傾聴」についてのウェイン神父さんのお話は本当に時宜を得ていたと思います。



左から ボランティア、谷司教、小名浜の人たち

私にとって、毎晩揺れる余震で寝袋の中で何度も目を覚まし、閉まらない窓には新聞紙を詰め、寒さをしのぎ、風呂はなく銭湯に行くこともあり、毎晩遅く高速で茨城県の日立教会まで戻ってくるという疲れがあったにもかかわらず、5名の素晴らしいメンバーに恵まれ、夕食時のわかちあいと祈りのうちに、出来事を通して働かれる聖霊の導きを感じないではいられない貴重な体験でした。



小名浜埠頭 倉庫群